日本語表記の史的展開における宣命書きの機能とその位置付けの研究

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>乾 善彦</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>日本語表記の史的展開における宣命書きの機能とその位置付けの研究</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>未定</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2003年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10112/2427">http://hdl.handle.net/10112/2427</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
『平安遺文』の宣命書書き資料

はじめに

奈良時代の言語資料として貴重な存在であり、筆者もこれに基づいて部分的に宣命書書きの機能をはじめとする一連の論考を提示してきた。これにより、それほど多くない平安時代の言語資料による国語学的研究は、それほど多くない平安時代の言語資料に加えて教科書資料や、いわゆる記録資料など、分量的にも質的にも奈良時代のそれとは比較にならないほど豊富である。これらの資料は、両方ともに適切な編集がなされ、まとまった資料としての研究は可能である。しかし、資料の集積がなされていないこともあり、ほとんどの直訳もみられることと、手稿の集積がなされていないこととは、今までも小谷挙泰、松本卓也、馬場隆治の研究、 primitivesがなされてきた。しかし、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあり、些細な資料が集積されている。今後、これらの資料を集積することによって、資料の集積がなされていないこともあ
ことともありうる（資料編）には、本稿後に確認したものを補っ
ている」。また、「満密にいえば宣命書を発する」ということになる。
地域名に「之」のような定型の小書きは、すなわち新書でな
い。したがって、この四百四十六の数字は、最小限の数字であ
ることになる。ただし、中には、著書や写しのように厳密にこ
れを資料として利用できるかどうか疑わしいものも含まれるこ
とななり、今後の資料性の見極めが必要な作業として測る。
それでも、平安時代における文書のはかきを、ひとまずこれ
によって概括することは許されよう。それらを、巻ごとに示す
と次のようになる。一番下、「の」の数字が今回抽出された文
書数である。

第二巻
安和三年（九八〇年）

第三巻
安和三年（九八〇年）

第四巻
河合（九八〇年）

第五巻
河合（九八〇年）

第六巻
河合（九八〇年）

第七巻
河合（九八〇年）

第八巻
治承元年（〇八二年）

第九巻
延暦二年（七四三年）

第十巻
新続補遺

第十一巻
補遺

第十二巻
補遺

第十三巻
補遺

第十四巻
補遺

第十五巻
補遺

第十六巻
補遺

第十七巻
補遺

第十八巻
補遺

第十九巻
補遺

第二十巻
補遺

第二十一巻
補遺

第二十二巻
補遺

第二十三巻
補遺

第二十四巻
補遺

第二十五巻
補遺

第二十六巻
補遺

第二十七巻
補遺

第二十八巻
補遺

第二十九巻
補遺

第三十巻
補遺

第三十一巻
補遺

第三十二巻
補遺

第三十三巻
補遺

第三十四巻
補遺

第三十五巻
補遺

第三十六巻
補遺

第三十七巻
補遺

第三十八巻
補遺

第三十九巻
補遺

第四十巻
補遺

第四十一巻
補遺

第四十二巻
補遺

第四十三巻
補遺

第四十四巻
補遺

第四十五巻
補遺

第四十六巻
補遺

第四十七巻
補遺

第四十八巻
補遺

第四十九巻
補遺

第五十巻
補遺

第五十一巻
補遺

第五十二巻
補遺

第五十三巻
補遺

第五十四巻
補遺

第五十五巻
補遺

第五十六巻
補遺

第五十七巻
補遺

第五十八巻
補遺

第五十九巻
補遺

第六十巻
補遺

第六十一巻
補遺

第六十二巻
補遺

第六十三巻
補遺

第六十四巻
補遺

第六十五巻
補遺

第六十六巻
補遺

第六十七巻
補遺

第六十八巻
補遺

第六十九巻
補遺

第七十巻
補遺

第七十一巻
補遺

第七十二巻
補遺

第七十三巻
補遺

第七十四巻
補遺

第七十五巻
補遺

第七十六巻
補遺

第七十七巻
補遺

第七十八巻
補遺

第七十九巻
補遺

第八十巻
補遺

第八十一巻
補遺

第八十二巻
補遺

第八十三巻
補遺

第八十四巻
補遺

第八十五巻
補遺

第八十六巻
補遺

第八十七巻
補遺

第八十八巻
補遺

第八十九巻
補遺

第九十巻
補遺

第九十一巻
補遺

第九十二巻
補遺

第九十三巻
補遺

第九十四巻
補遺

第九十五巻
補遺

第九十六巻
補遺

第九十七巻
補遺

第九十八巻
補遺

第九十九巻
補遺

第一百巻
補遺

第一百零巻
補遺

第一百零一巻
補遺

第一百零二巻
補遺

第一百零三巻
補遺

第一百零四巻
補遺

第一百零五巻
補遺

第一百零六巻
補遺

第一百零七巻
補遺
白河法華御告文（586） 石清水田中家文書
一九三 四
二九三 五
三九三 六
四九三 七
五九三 八
五九三 一

補二九四
大江匡房告文（585） 石清水田中家文書

補三九五
太平神宮開帳宣命案（584） 石清水田中家文書

補四九六
三月上皇告文（583） 石清水田中家文書

補五九七
後白河法皇尊名宣念祝詞（582） 石清水田中家文書

補六九八
四月八日

補七九九
安芸国司・大宮念祝詞（581） 石清水田中家文書

補八九零
七日倭坂文書

補九九一
元伊豆郡

補九九二
上総総坊文書

補九九三
志賀野坂文書

補九九四
文書に近い部分がある。

補九九五
後白河法皇尊名宣念祝詞（580） 石清水田中家文書

補九九六
西大寺及延曇寺石清水□□□、依別当（581）

補九九七
横法念詔（582） 不可遅退、所□□寺別当 nick

補九九八
無常日

補九九九
義経寺

補九九九
はる喜天皇

補九九九
是天皇

補九九九
是天皇

補九九九
是天皇

補九九九
是天皇

補九九九
是天皇

補九九九
是天皇

補九九九
是天皇

補九九九
是天皇

補九九九
是天皇
昭和五年三月三日
大史小検補（在表）
頂礼

（七百九）

書簡旨（東南院文書二ノ五）

前はこの事件に対する朝廷に裁量を求めるものであり、その中にあらわれた「事進日記通」が、問題を拾ったもののようである。この日記が、このような形で進上されたものであり、その中にある「事進日記通」が、問題を拾ったものである。後者は、これに対する官の宣旨であり、左宣旨から東大寺に下されたものである。前者に含まれる内容の事項が、後者にはない。日記に記されたものである。つまり、同じ内容を、どのように書くかということは、その文書の用途や種類によって異なりますか。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七八

高野山文書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）

補一七九

東大寺仏書

ここで日記とされるのは、事件の顕在を記したいもので、例示したような「事進日記」ではそれではない。言い方を多少の異なりはあるものの、のひとつに定型する。冒頭と結びをあわせ次のようなあらわすことができる。

吉田文書（二八・二）
ここに水主と鶴君との問答が記されているが、答の部分には文書がまぎらわしくある。また、問答の形式は三箇所のうち二箇所に「答申（「…」）というように、発話と受諾を前後させた形式が見られる。このような、問答を含む文書は平安時代には、問注文書とよばれる類文の公式文書形式によっても、同じ内容を記述したということも示している。

四、問注文書の形式

問注文書は、社会各階層の文書形態の一つであり、問答の形式を前後させた形式が見られる。このように、問答を含む文書は平安時代には、問注文書とよばれる類文の公式文書形式によっても、同じ内容を記述したということも示している。

四、問注文書の形式

問注文書は、社会各階層の文書形態の一つであり、問答の形式を前後させた形式が見られる。このように、問答を含む文書は平安時代には、問注文書とよばれる類文の公式文書形式によっても、同じ内容を記述したということも示している。

四、問注文書の形式

問注文書は、社会各階層の文書形態の一つであり、問答の形式を前後させた形式が見られる。このように、問答を含む文書は平安時代には、問注文書とよばれる類文の公式文書形式によっても、同じ内容を記述したということも示している。

四、問注文書の形式

問注文書は、社会各階層の文書形態の一つであり、問答の形式を前後させた形式が見られる。このように、問答を含む文書は平安時代には、問注文書とよばれる類文の公式文書形式によっても、同じ内容を記述したということも示している。
部分をあらわし、は割書きの改行部分をあらわす。

5 他の平安遺文の表題には、一二七八が字佐宮公
文所間注記とあるが、冒頭には「間注御装束所検校末
より上げの間注の文書であり、形式が異なる。
この文書については、沖森卓也『日本古代の表記と文
体』（○○○、吉川弘文館）に問及形式の特徴について
の言及がある（二八頁）。

（補注）本研究報告に付した資料編は、仮名文書を含めて調
査においており、本稿に引用する通し番号とは大幅に異
なる。したがって、本文を参照する場合は、平安遺文の文
書番号にようばれたい。

（女子大学文学国文学論集五三号）